

【緑地を楽しむ本】

## 『紅玉』

後藤竜二 文 高田三郎 絵

新日本出版社



紅玉が好きだ。あの真っ赤な色、田舎娘の優しさ。冬の夜は、甘酸っぱいアップルパイとコーヒー？ それとも、熱々の焼リンゴか… ちょっと地味な装丁のこの本を手にした時も、どんな紅玉の不思議を教えてくれるのだろう、リンゴ開発の歴史かな？ などと期待がいっぱいだった。ところが、その期待はものの見事に裏切られた。そして5分後、

私の顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた。

戦後、復員してきたお父さんは、荒廃の中でリンゴを夢中で育て、収穫を楽しみにしていた。そのリンゴが、近くの炭鉱に連れられてきていた朝鮮や中国の人たち

に取られてしまう。互いに生きることにギリギリの厳しい生活での攻防。

人間の尊厳とは？ 生きるとは？ …多くの？が、胸の中で駆け巡る。尖閣や竹島を巡って、今また国と国の感情がぶつかり合っている。しかし、人とは、この本のように個人で相対して初めて理解しあえるのではないか… そんな熱い想いがふつふつと湧いてくるのを抑えられない。

著者の父は、この本が出版された当時(2005年)は89歳で元気、毎年リンゴの時期になるとこの話を、ぼそぼそとしていたとか。あの時期、どこにでも転がっていた話かもしれない、でもそれだからこそ、ぜひ忘れずに語りついでいきたいと思う。

(小川)